

ウ、オニタピラコ、メダケ、ススキ、チジミザサ、ナキリスゲ、セキショウ、ムサシアブミ、スズメノヤリ、ウバユリ、ヨゴレウバユリ、キチジョウソウ、ヤブラン、ジャノヒゲ、サルトリイバラ、ヒガンバナ、シャガ、シュンラン、コ克蘭、フウラン、ナギラン、ムヨウラン。

總括 1) 高知縣宇佐町青龍寺の樹相はシノキを優占種としてイスノキを随伴し、林内常緑潤葉樹密生して、地表はホソバカナワラビ及びビツルコウジの最も優勢な暖帯林の代表的構造を有する故にこれがフロラを調査し現在までに明かにされたものは變形菌 8 屬 9 種、苔類 28 屬 52 種 1 變種 1 品種、蘚類 31 屬 51 種、羊齒類 33 屬 47 種 4 變種、種子植物 103 屬 105 種 11 變種 1 品種に達する。

2) これらの中、變形菌には特に顯著なものは見當らないが蘚苔類のフロラは極めて豊富で Hep-Q, Mus-Q は夫々 16, 4.8 という高値を示している。その中 *Makinoa crispata* の如く當然出現すべくして見られないものもあるが一般に暖帯林フロラを代表するものが多く特に *Leptocolea* の 5 種を初めとして 10 種に余る生葉上苔類の極めて豊富に生育する事は注目し値する。尙又 *Monoselenium tenerum* が青龍寺境内及びその附近に多い點も特記してよい。

3) 羊齒類もまた豊富であり Ptp-Q は 11.0 に達する。中にもシロヤマシダ、イワヒトデ、ヘラシダ、カツモウイノデ、クルマシダ等は各地に群落をなしている。ハヤマシダ、マツバラは林内に稀少な存在である。

4) 種子植物の多數は木本であるがその 83.5% は常緑潤葉樹が占めており攀緣植物もまた木本中の 17.9% に達する。而してツバキ科、クスノキ科、ブナ科、モクレン科、モチノキ科、ヤブコウジ科、ハイノキ科、アカネ科は比較的多くの木本を包含し暖帯林のフロラ構成の一般傾向を示している。

尙本寺叢はタブノキの全然存しないのが顯著である。草本ではラン科、キク科のものが他に比し多い。又以上の中亜熱帯性の南方要素と見るべきものにはツゲモチ、ピロウドムラサキ、ミサオノキ、ナギ、ヤマモガシ、オガタモノキ、コバンモチ、モロコシウ等多數が認められる。

5) 以上の考察結果から本寺叢は最も良好に保存された高知市附近本來の暖帯林の縮圖と考えて差支ない。

○リュウキュウヤブイチゴの分布は千葉縣に及ぶ (倉田悟) Satoru KURATA : The occurrence of *Rubus okinawensis* Koidz. in Honshu.

リュウキュウヤブイチゴは小泉先生が 1913 年に琉球産品により發表されたもので、其後屋久島に産するとの報告はあつたが、未だそれ以北に野生の報はない。尤も以前から九州南部の産は田代善太郎先生等の採集により判明していた。筆者は 1949 年 11 月南伊豆の上河津村荻ノ入國有林内にて腺毛の短かいコジキイチゴ類似品を採集したが、稚苗なりし爲判つきりしなかつた。次いで昨年 2 月同村大鍋より沼ノ川に到る峠道にて

良く發育した株に出會い、莖、葉の腺毛がコジキイチゴに比し短かい性質を確めた。しかし冬期であつたので花果は見得なかつた。更に6月千葉縣清澄山にてこの型のものが處々の疎開せる谷沿い等に結實せるを見出し、東京大學千葉演習林所藏の腊葉を検したる所、コジキイチゴ或はヒメバライチゴと誤認された有花の腊葉が出て來た。尙意外にも眞のコジキイチゴは一枚もなく、筆者も清澄ではその自生に接しない。しかしコジキイチゴは南伊豆から常陸の御前山に分布が及んでいるから、房總にも産する事と思う。さて以上の標本を精査した結果、これはリュウキュウヤブイチゴである事が判明した。

此所で注意すべきは1930年紀伊産品によりキシウイチゴ、次いで1934年伊勢産品によりイセイイチゴがそれぞれ小泉・本田兩先生によつて記載された事である。兩先生ともリュウキュウヤブイチゴとは格別比較をされていないが、この三者は同一種と考える。葉裏の有毛状態、老枝に腺毛の有無等は變化の多い性質であり、又果實については清澄山にも丸いものと長めのものがあるが、これも中間型で連絡される。唯南方産のものは花・實・葉すべて稍々大型にして特に琉球産のものは枝の先に數個の花が集つて円錐花序をなす傾向があるに對し、北方産は1~3個の花が枝先に着くのみである。しかしこれは南方産が發育良好なる爲と考えられ、中間的のものもある。本種はコジキイチゴに近縁であるが、花が大形にして腊葉で徑4cmに達するものあり、従つて花瓣の長さもコジキイチゴが1cm位なるに對し2cmに近く、幅も廣く廣倒卵形を呈し、コジキイチゴの長楕円形~筒形なるとは容易に區別が出来る。又果實がコジキイチゴより丸味を持つている。更に無花果の時も腺毛の長短により識別出来る判然たる種類である。

尙國立科學博物館の腊葉を見るに、牧野、根本兩氏共編の東京帝國博物館天産課日本植物乾腊標本目錄中 オオバライチゴの項に紀伊三浦産とあるはリュウキュウヤブイチゴであり、キシウイチゴの type locality も紀伊三浦である。終りに腊葉の研究を許された同館並に東大理學部植物學教室に深く謝意を表する。

Rubus okinawensis Koidz., Consp. Rosac. Jap. 140 (1913); Masamune, Fl. and Geobot. Stud. Yakusima 231 (1934). *Rubus kinokuniensis* Koidz., Fl. Symb. Or.-As. 67 (1930), et in Acta Phytotax. Geobot, 3: 176 (1934). *Rubus isensis* Honda in Bot. Mag. Tokyo 48: 406 (1934). Distr.: Honshū (Prov. Awa, Izu, Ise and Kii) Kyūshū (Prov. Chikuzen, Hizen, Hyuga, Satsuma and Ohsumi) and Lyukyu. This species is closely related to *Rubus asper* Wallich. However, its glandular hairs are shorter (about 1 mm long) and its petals are larger (about 2 cm long, 1.5 cm wide).

お知らせ。山形大學農學部應用植物學研究室では地衣學雜誌と題するパンフレットを發行した。編輯は同研究室の佐藤正己博士で、地衣學界のニュースや文献抄録など、地衣類に關する記事だけを掲載してある。A5判4頁、發行は不定期で本年5月に第1號が、7月に第2號が出版された。入手希望の向は1部に付き6圓切手6枚を封入し山形縣鶴岡市、山形大學農學部佐藤正己氏宛申込み、殘部のある限りお送りする由。